

談話室

岩井秀夫さん葬儀挨拶

(再録)

本日は、新型コロナウイルスの影響で、外出がはばかられる中、故人岩井秀夫のためにご会葬くださいまして誠にありがとうございました。

私は故人の友人の関口隆史と申します。物材機構から筑波大まで、彼の最後の10年余りを一緒にさせていただきました。本日、喪主の岩井あい子さんが出席できないため、代わりに代表挨拶を務めさせていただきます。

故人の生前中は、皆様より格別なご厚情をいただきまして、ありがとうございました。

まず、岩井さんの人生の歩みを簡単に振り返ろうと思います。

岩井さんは、昭和34年に岩井惣藏、あい子夫妻の一人っ子として生まれ、昭和56年に学習院大学理学部を卒業するまで、板橋区西台の実家で母親の深い愛情を受けて過ごしました。アルバックファイに入社し、研究員として、AugerやXPSなどの表面分析装置の開発、設計を担当し、また部長になってからは、装置の製造、販売まで見るようになりました。まさに、世界に冠たるアルバックファイの分析装置の責任者として、重責を果たしておりました。平成19年にNIMSに移られてからは、Auger, XPS, SIMSの分析と標準化に携わって、分析ステーションの重鎮となっております。また、私と一緒に噴水検出器という新しい検出器を開発し、SEMの世界を変える努力をしてくださいました。NIMS定年後、今年の2月からは、研究員として週一回筑波大学の私の研究室に来られて、技術の伝承にあたってくださいました。

残念なことに岩井さんは、3年ほど前から多系統萎縮症という神経の難病にかかり、だんだん体の自由が利かなくなり、杖から、歩行器、電動車いすの生活と、病気は進行していきました。長い通勤ができなくなり、茅ヶ崎からNIMSの目の前のマンションに引っ越し、ヘルパーさんの助けを借りて生活していましたが、それも難しくなり、この3月にかすみがうら市の施設に転居しました。半月ほどしてお母さんも引っ越ししてこられ、親子での生活が始まりました。ただ、食べ物がのどを通らなくなってきたので、連休明けに胃瘻の手術をする予定で、病院を予約していました。胃瘻をすれば栄養が摂れて元気になるだろうと期待していた矢先、5月7日の晩に薬を飲んで寝がえりをしたら、急に意識がなくなり、救急車で筑波大病院に運ばれました。集中治療室で手当てを受けながら、CTを撮ったところ、足の静脈でできたらしい大きな血栓が肺動脈をふさいで、肺塞栓症になっていることがわかりました。血栓を溶かす薬を投与して治療を続けたのですが、薬石効なく、9日未明に息を引き取られました。享年61歳でした。

周囲の者たちは、岩井さんにもう一仕事してくださることを期待していたので、こんな早い幕切れは、残念でなりません。

ご案内にも記しましたが、岩井さんは浦島太郎だと思っています。多系統萎縮症という玉手箱を開けて、一気に年を取られてしまいました。ただ、晩年のつくばでの生活は、白須さんというケアマネージャーや、多田さんをはじめとする優しいヘルパーさんたちに囲まれ、竜宮城のような生活で、体は不自由でも決して暗い生活ではなかったことをお伝えしておきます。

本日は、皆様においでいただき、このようにお見送りをしていただくことで、故人は十分満足していることと思います。

関係者を代表しまして、お礼のごあいさつに代えさせていただきます。

本日はありがとうございました。

令和2年5月12日

関口 隆史